県立広島大学人間文化学部紀要　5，147-160（2010）

県立広島大学人間文化学部国際文化学科紀要　五、一四七―一六〇（二〇一〇）

慈円『仙洞句題五十首』『最勝四天王院障子和歌』校注

石川　一

本稿は慈円の『仙洞句題五十首』と『最勝四天王院障子和歌』の当該作品に校注を付したものである。

〔凡例〕

1　『仙洞句題五十首』の本文は宮内庁書陵部蔵（502・23）、『最勝四天王院障子和歌』の本文は同じく宮内庁書陵部蔵（502・8）に拠り、できるだけ忠実に底本の原態が復元できるように努めた。

2　本文に問題のある箇所については、（ママ）を付し、注で他伝本の本文で校訂した。校本として、『仙洞句題五十首』は、群大図書館蔵本（N911・13／G72）・彰考館文庫蔵本（巳10・07100）・宮内庁書陵部蔵本（453・2）を、『最勝四天王院障子和歌』は、宮内庁書陵部蔵本（452・7）・書陵部蔵本「先代御便覧」所収本（265・113）・内閣文庫蔵本（201・564）を適宜参照した。

3　漢字を宛てた場合は、底本を振り仮名の形で表した。

4　難解な語句には読み仮名を付け、（　）で囲み、底本と区別した。

5　便宜的に歌番号（『仙洞句題五十首』c01～49、『最勝四天王院障子和歌』d01～46）を付した。

6　勅撰集、特に新古今集入集については、注の冒頭に明記した。

7　その他、参考にすべき事項については、▽を付して補足した。

『仙洞句題五十首』（書502・23）

「詠五十首和歌」（内題）

前大僧正

初春待花

c01　春来れば先づぞ待たるゝ挿頭すべき我君が世の千代の初花

山路尋花

c03　行末の雲やまことの花ならん過ぎつる嶺の花の白雲

山花未遍

c02　咲きやらぬ峰の梢の雲の上によそ目は花の盛なりけり

朝見花

c04　いかにせむ今朝は梢に風過て春も眺むる朝顔の花

遠村花

c05　三輪の里花のしるべは石の上布留の梢に掛かゝる白雲

故郷花

c06　散散らず人も尋ねぬ故郷の露けき花に春風ぞ吹く

田家花

c07　桜咲く山田の原の花盛り秋ならずとも庵結ばなん

古寺花

c08　春の衣幾重に成ぬ初瀬山古りぬは花の匂ひなりけり

花似雪

c09　あやしなほ去年の白雪春掛けて花咲く比も散らずやはあらず

河辺花

c10　白河の浪に乱れて咲く花は糸縒りかくる桜なりけり

深山花
c11 吉野山春は過ぬと訪ぬれば奥こそ花の盛り成けれ
暮山花
c12 春来れば嬉しき山の桜狩花の木陰に暮れかゝりぬる
古渓花
c13 谷川の陰の岩角苔ふりて春のみ越ゆる花の白浪
関路花
c14 駒なべて互ひに跡を惜しむかな花の雪散る白河の関
羈中花
c15 東路や山に日数ぞ近く行花無き里に宿借らずして
湖上花
（欠落）
橋下花
c16 風渡る花を三河の八橋の蜘蛛手に掛かる滝の白糸
花下送日
c17 咲きて散る日数思へば山桜ほどは七日の花の下伏
庭上落花
c18 厭ふべき庭こそ今は盛なれ梢の風や伴の宮つこ
暮春惜花
c19 散り残る花の春風心せよ今日の別れの忘れ形見に
初秋月
c20 星合の空を待間の夕月夜秋の思のこれよりぞかし
月前草花
c21 秋の野に月澄む夜半の小萩原夜の錦を人に見せつゝ
雨後月
c22 何せんにしばし曇ると歎きけむ月影洗ふ秋の時雨を
松間月
c23 松に澄む木の間の月を眺むれば葉分の霜に秋風そ吹
山家月
c24 山里に月は見るやと人は来ず空行風ぞ木の葉をも訪ふ
月前竹風
c25 月の澄む籬の竹に吹風はおのが隈をも払ふなりけり
野径月
c26 秋の野に月の傾げる宿なれば眺め行こそ泊まりなりけれ
沢辺月
c27 月澄めば沢辺の蘆にすむ田鶴の雪の衣に霜や置らん
月前聞雁
c28 大江山傾く月の影冴えて鳥羽田の面に落る雁金
浦辺月
c29 月の秋明石の浦に心せよ島隠れすむ海人の藻塩火
月照滝水
c30 やはらぐる影添ふ那智の月影に夜とも見えぬ滝の白糸
杜間月
c31 中々に雫に宿る月を見む信太の杜の千枝の下陰
月前秋風
c32 寂しさや月の光に類ふらんいづくも同じ荻の上風
江上月
c33 松風に契り置きつる月影の顕れわたる住の江の秋
月前虫
c34 我も鳴きてげにも悲しき蟲蓬が杣に有明の月
月前聞鹿
c35 小牡鹿は声に立てゝぞ眺むなる涙に宿る野辺の月影
旅泊月
c36 秋の夜の浮寝に夢を湊河覚むる枕に月ぞ流るゝ
月前草露
c37 白露をおのが宿りと見せ顔に千草に掛かる秋の夜の月
菊籬月
c38 籬の内に移ろふ菊の色を又返すは月の光なりけり

暮秋暁月

c39 眺めかねて秋も今はの在明を心に問へば月ぞ答ふる

寄雲恋

c40 我恋は花に移りし春の雲の離れて五月の空に成ぬる

寄風恋

c41 花に厭ひ月に忍びし風の音の夜な〳〵人を松の梢に

寄雨恋

c42 我袂時雨に色を見よとてや猶五月雨に朽残りけん

寄草恋

c43 いかにせむと思ひ果てぬる我恋は荻の上葉の秋の初風

寄木恋

c44 袖よいかに深山に茂き槙の葉も萎れて色は変らざりけり

寄鳥恋

c45 しるべなき泪の河の川風に思ひかねても千鳥をぞ聞く

寄嵐恋

c46 色変る野辺の景色に吹そめてむべ山風を人の心に

寄舟恋

c47 我恋の眺めを見せん明石潟漕ぎ行舟に秋の朝霧

寄琴恋

c48 松風の籠の内の鶴声澄みて袖より落つる滝も流れず

寄衣恋

c49 唐衣いかに返して逢ことの寝ぬ夜の夢にならんとすらん

校注

c01 ○挿頭すべき…挿頭すにちがいない。花や枝を折って髪や冠に挿すことは当時の習慣であった。「妹が手を取りて引き寄せうつ手折り我がかざすべき花咲けるかも」（古今和歌六帖・祝「かざし」二三二一　柿本人丸）　○君が世…下命者であり、主催者としての後鳥羽院をさす。　○初花…その年、その季節に初めて咲いた花。

c02 ○上句…行末の雲こそ真の花にしよう。　○花の白雲…「花」を「雲」に見立てたもの。「桜花咲きにけらしな足曳きの山の峡より見ゆる白雲」（古今・春五九　紀貫之）

c03 ○咲きやらぬ…遠くまで咲いてはいない。　○よそ目…よそながら見ること。　▽峰の「雲」を「花」に見立てて、花盛りと見えるという。「み吉野の吉野の山の桜花白雲とのみ見えまがひつつ」（後撰・春一一七　読人不知）

c04 参考「山がつの垣ほに咲ける朝顔はしののめならで逢ふよしもなし」（新古今・秋三四四　紀貫之）　○風過て…風が吹き過ぎて露わになった。　○春も眺むる…秋の花の「朝顔」を春でも眺めることのできる。　○朝顔の花…「朝顔」にその「朝の寝起きの顔」を響かせる。　▽春の朝には風で露わになった花の「寝起きの顔」を見るという滑稽な発想。

c05 ○三輪の里…大和国の歌枕。桜井市三輪、三輪山を神体とする大神（おほみわ）神社がある。　○花のしるべ…花の手引き。　○石の上布留…「石の上」は「布留」に掛かる枕詞。布留は大和国の歌枕。天理市布留、石上（いそのかみ）神宮がある。　▽「雲」を「花」に見立て、実際の花の「しるべ」となるという。

c06 ▽底本「散」は「ちる」ではなく、「ちり」と読む。新編国歌大観は「ちる」。新古今・春九五。本歌「散り散らず聞かまほしきを故郷の花見て帰る人も逢はなん」（拾遺・春四九　伊勢）　○散散らず…散るのか散らないのか。　○露けき花…露に濡れてしっとりとしている花。尋ねてこないので、悲しみの涙に濡れる意を含ませる。

c07 ○山田の原…山あいの野原。　○秋ならずとも…秋でなくとも。　▽人里離れた山田は収穫を奪われる心配があるので、庵を結んで「守（も）る」必要があった。「穂にも出でぬ山田を守ると藤衣稲葉の露に濡れぬ日ぞなき」（古今・秋三〇七　読人不知）

c08 ○春の衣…霞のこと。「み吉野の奥に住むなる山人の春の衣は霞なりけり」（秋篠月清集一〇四）　○初瀬山…大和国の歌枕。桜井市初瀬町、泊瀬山・巻向山などに囲まれた峡谷で、長谷寺があることで有名。　○古りぬは…「降りぬ」を掛け、古びることのないもの、また降ってしまったもの。

c09 ○あやし…不思議である。　○散らずやはあらず…散らないことがあるだろうか。　▽「雪」は「花」の見立てだが、実際の花の咲く頃は雪のように散らないのかとの疑問。「み吉野の山辺に咲ける桜花雪かとのみぞあやまたれける」（古今・春六〇　紀友則）

c10 ○白河…山城国の歌枕。比叡山に端を発し、黒谷の東を南流して疎水に注ぐ川。その川の名が賀茂川以東、東山に掛けての地名ともなっていた。　○糸縒りかくる…糸を縒り合わせたように見える。本来は「青柳の糸」に関する表現だが、ここでは白河の花に転用。「青柳の糸よりかくる春しもぞ乱れて花の綻びにける」（古今・春二六　紀貫之）

c11 ○吉野山…大和国の歌枕。奈良県吉野郡の山の総称。　▽吉野の奥は里よりも遅く春が来るので、里の春が過ぎた後に奥では「花の盛り」を迎える。

c12 ○桜狩…桜の花を尋ね求めて山野を歩き回ること。　○花の木陰…花の下の宿り。「いざ今日は春の山辺にまじりなむ暮れなばなげの花の陰かは」（古今・春九五・素性）

c13 ○岩角…岩のとがって突き出た部分。　○花の白浪…ここでは「春のみ」とあるから、花自身を白浪に喩える。「川」「越ゆる」「浪」は縁語。「吉野川水嵩（みかさ）はさしも増さらじを青根を越すや花の白浪」（千載・春六五　顕昭）　▽苔の色と「白浪」の対照。

c14 ○駒なべて…駒を並べて。「並ぶ」は「並む」とも。「駒なべていざ見に行かん故郷は雪とのみこそ花は散るらめ」（古今和歌六帖・田舎「ふるさと」一三〇〇）　○花の雪散る…「雪」は「花」の比喩。『詠歌一躰』は制詞とする。「又や見む交野の御野の桜狩花の雪散る春の曙」（新古今・春一一四　藤原俊成）

○白河の関…陸奥の歌枕。岩代国、福島県白河市にあった古代の関所。

c15 ○東路…東北地方。　○花無き里…「花」は春の象徴で、永遠に春の来ない所をいう。「春霞立つを見捨てて行く雁は花無き里に住みやならへる」（古今・春三一　伊勢）　▽雁の帰る「花なき里」とは越路の奥にあり、東路もその一部と考えられていた。

c16 ○八橋…三河国の歌枕。愛知県知立市。　○蜘蛛手…川の流れが八方に分かれていることによる。「打ち渡し長き心は八橋の蜘蛛手に思ふ事は絶えせじ」（後撰・恋五七〇　読人不知）　○滝の白糸…滝のようになって流れる水を「糸」に喩えたもの。

c17 ○ほどは七日…花の咲いている間は七日に過ぎない。　○花の下伏…花の下で寝ること。「春の山に洩り来る月に風過ぎて涙露けき花の下伏」（正治二年初度百首・春六一七　慈円）

c18 本歌「殿守の伴の御奴心あらばこの春ばかり朝清めすな」（拾遺・雑春一〇五五　源公忠）　○厭ふべき…嫌うに違いない。

○伴の宮つこ…伴の御奴。下級の官人。

c19 ○心せよ…風に対して花を吹き散らすなと呼び掛けた。「吹く風も花のあたりは心せよ今日をば常の春とやは見る」（金葉・春三二　太宰大弐長実）　○忘れ形見…忘れ難いようにと残された記念。

c20 ○星合…陰暦七月七日の夜、織女星と牽牛星が逢ひ合うこと。

○夕月夜…夕月の出ている暮れ方。　○秋の思ひ…漢語「秋思」の訓。「月にこそ秋の思ひは増さりけれ暗部の山に我は住ましし」（林葉集五一二）

c21 本歌「見る人もなくて散りぬる奥山の紅葉は夜の錦なりける」（古今・秋二九七　紀貫之）　○夜の錦…甲斐がないことの喩

え。

c22 ○何せんに…反語の表現。何になろうか。「逢ふまでの形見も我は何せむに見ても心の慰まなくに」（古今・恋七四四　読人不知）　○月影洗ふ…月を洗うかのような。

c23 ○木の間の月…木の間から洩れる月。　○葉分の霜…月の光を「霜」に見立て、葉と葉の間を分ける霜と表現した。「朝日さす光を見ても玉笹の葉分の霜を消たずもあらなむ」（源氏物語・藤袴四〇四　兵部卿宮）

c24 新古今・雑一五二〇　○月は見るやと…風雅を解する人の言葉。心なき風との対照。直接話法で肉声の親近感を示す。「霜さゆる庭の木の葉を踏み分けて月は見るやと訪ふ人もがな」（千載・雑一〇〇九　西行）　○空行風…空に吹く風。

c25 ○籬…柴や竹などで目を粗く編んだ垣根。「ませがき」とも。　○おのが隈…自分の陰り。月を擬人化したもの。

c26 ○月の傾げる…月が傾くのを眺められる。　○泊まり…眺め行くこと自体が「泊まり」ということになる。「山近く浦漕ぐ舟は時鳥鳴くわたりこそ泊まりなりけれ」（金葉・夏一二一　康資王母）

c27 ○雪の衣…鶴の毛衣の白さを「雪」と表現した。　○霜…月光に照り輝くことの比喩。「夏の夜の霜や置けると見るまでに荒れたる宿を照らす月影」（古今和歌六帖・夏の月・二八六）

c28 新古今・秋五〇三　○大江山…山城・丹波国境の老坂、京都市西京区大枝。　○鳥羽田…山城国の歌枕。京都市南区上鳥羽と伏見区下鳥羽の一帯。　○落る雁金…一列の雁が下りてくる意。漢語「落雁」の訓か。　▽「傾く月の影」と「落る雁金」とが対照されている。雁の声が降りてくる意も含む。

c29 ○明石の浦…播磨国の歌枕。明石市辺の海岸。　○心せよ…海人に対して藻塩火の煙で月を曇らすなと呼び掛けた。　○島隠れすむ…島の陰に隠れ住む。「ほのぼのと明石の浦の朝霧に島隠れ行く舟をしぞ思ふ」（古今・羇旅四〇九　読人不知）　○藻塩火…藻塩を焚く火。

c30 ○やはらぐる…和光同塵。神仏習合思想の表現。　○那智…熊野那智大社。　○夜…「縒る」を掛け、「縒る」は「糸」の縁語。　○滝の白糸…滝の筋のようになって流れる水を「糸」に喩えたもの。

c31 本歌「和泉なる信太の森の葛の葉の千枝に分かれて物をこそ思へ」（古今和歌六帖・もり・一〇四九）　○中々に…かえって。　○雫…千枝の葉ごとに宿る水滴。　○信太の杜…和泉国の歌枕。大阪府和泉市の葛の葉神社がその跡とされる。

c32 本歌「寂しさに宿を立ち出でて眺むればいづくも同じ秋の夕暮」（後拾遺・秋三三三　良暹）　○類ふらん…どうして寄り添っているのだろうか。　○荻の上風…秋の侘びしさを知る手だて。「秋はなほ夕まぐれこそただならね荻の上風萩の下露」（義孝集四）

c33 ○契り…永遠の象徴である「松」に対しての約束。　○頭れわたる…次第に現して来る。　○住の江…摂津国の歌枕。大阪市住吉区の一帯の海岸。住吉神社があった。「我見ても久しくなりぬ住の江の岸の姫松幾世経ぬらん」（古今・雑九〇五　読人不知）

c34 本歌「鳴けや鳴け蓬が杣の蟇過ぎゆく秋はげにぞ悲しき」（後拾遺・秋二七三　曽禰好忠）　○我も…虫だけでなく、「私」も。　○蟇…蟋蟀のきりぎりす。今のコオロギのこと。「蟋蟀いたく鳴きそ秋の夜の長き思ひは我ぞまされる」（古今・秋一九六　藤原忠房）　○蓬が杣…「杣」は材木にするために植林した木。蓬を杣山の杣に見立てた表現。

c35 ○小牡鹿…雄の鹿。その鳴き声によって、秋を悲しと観じた。「奥山に紅葉踏み分け鳴く鹿の声聞く時ぞ秋は悲しき」（古今・秋二一五　読人不知）　○眺むなる…眺めるに違いない。「なる」は伝聞・推定の助動詞「なり」の連体形。　○涙に宿る…涙に月

影が映る。

c36 ○浮寝…船の上で寝ること。○湊河…夢を「見（る）」を掛ける。摂津国の歌枕。八部郡兵庫、今の神戸市を流れる川。「湊川浮寝の床に聞こゆなり生田の奥の小牡鹿の声」（千載・秋三一二　刑部卿範兼）　○月ぞ流るゝ…流れの早い雲の中の月を詠んだもの。

c37 ○おのが宿り…自分だけの住まい。○見せ顔に…見せたげに。「立ちかはる春を知れとも見せ顔に年を隔つる霞なりけり」（山家集四）　○千草に掛かる…多くの草にそれぞれ映る。

c38 ○籬…竹や木で作った低く粗い垣根。「ませがき」とも。○移ろふ菊…菊が次第に紅に変色してゆくことを賞美する。「秋をおきて時こそ有りけれ菊の花移ろふからに色のまされば」（古今・秋二七九　平貞文）　○又返す…再び白い色に戻す。▽月の光によって変色した菊を白く戻すという。

c39 ○眺めかねて…「かぬ」は思い通りに実現できない意を表す。○秋は今は…今はもう秋も最後だという。○心に問へば…心の中で自問してみると。○月ぞ答ふる…月がその心の問いに答えるかのように、照り輝いている。

c40 ▽底本「晴れ」を他本「かれ」に修訂。○花に移りし…花に関心が向いた。○雲…「花」の見立て。「み吉野の吉野の山の桜花白雲とのみ見えまがひつつ」（後撰・春一一七　読人不知）　○離れ…花が「枯れ」に掛ける。○五月の空…梅雨の晴れ間。

c41 ○花に厭ひ…花のために嫌い。「花散らす風の宿りは誰か知る我に教へよ行きて恨みむ」（古今・春七六　素性）　○月に忍びし…月のために忍んだ。「小夜更けて半ばたけ行く久方の月吹き返す秋の山風」（古今・物名四五二　景式王）　○夜なく…毎晩。○松…「待つ」を掛ける。

c42 ○時雨…木の葉を色付かせるもの。「長月の時雨の雨に濡れ通り春日の山は色付きにけり」（万葉・巻十）　○色を見よ…紅涙によって変わってしまった色を見なさい。○朽残りけん…朽ちることなく残ってしまった。「末の松浪の下にも年は経ぬ濡るとも朽ちぬ袂なりせば」（建久六年民部卿家歌合・「久恋」十八番左・二一九　藤原保季）　▽五月雨に袂を朽ちさせないで、時雨まで残そうという。

c43 ○思ひ果てぬる…あきらめてしまった。○荻の上葉の風…恋人への思いを「風」に寄せ、その風に「そよぐ荻」を「其よ」という相槌を思わせる。「さりともと思ひし人は音もせで荻の上葉に風ぞ吹くなる」（後拾遺・秋三二一　三条小右近）　○秋の初風…秋に「飽き」を響かせる。

c44 参考「ちはやぶる神垣山の榊葉は時雨に色も変らざりけり」（後撰・冬四五七　読人不知）　○袖よいかに…涙で色変わりする袖はどうだろうか。○萎れて…（槇の葉が）生気を失って。

c45 本歌「思ひかね妹がり行けば冬の夜の河風寒み千鳥鳴くなり」（拾遺・冬二二四　紀貫之）　○泪の河…涙川。涙を「川」に見立てた表現。「つれづれのながめにまさる涙河袖のみ濡れて逢ふよしもがな」（古今・恋六一七　藤原敏行）　○思ひかねても…恋しい思いに我慢できずに。

c46 本歌「吹くからに秋の草木のしをるればむべ山風を嵐と言ふらむ」（古今・秋二四九　文屋康秀）　○むべ…肯定の表現。○人の心に…人の心の中に「嵐」を想起させよう。

c47 本歌「世の中を何にたとへむ朝ぼらけ漕ぎ行く舟の跡の白浪」（拾遺・哀傷一三二七　沙弥満誓）・「ほのぼのと明石の浦の朝霧に島隠れ行く舟をしぞ思ふ」（古今・羇旅四〇九　読人不知）　○眺めを見せん…「眺め」は行方のこと。恋の行方を見せよう。○明石潟…播磨国の歌枕。明石市付近の海岸。

c48 本歌「第一第二絃索索　秋風払松疎韻落　第三第四絃冷冷　夜鶴憶子籠中鳴　第五絃声尤掩抑　隴水凍咽流不得」（和漢朗詠・管絃四六三　五弦弾）　○松風…松籟。「琴」に喩えられる。

「琴の音に峰の松風通ふらしいづれの緒より調べそめけむ」（拾遺・雑四五一　斎宮女御）　○籠の内の鶴…本歌の「夜の鶴子を憶ひて籠の中に鳴く」を引く。　○滝も流れず…本歌の「隴水凍り咽んで流るるを得ず」を引くが、「隴水」を「瀧水」とする伝本に拠るか。

c49　○唐衣…「返す」に掛かる枕詞。「唐衣日も夕暮になる時は返すぐぞ人は恋しき」（古今・恋五一五　読人不知）　○（衣を）返して…古代の俗信で、衣を返して寝ると恋しい人の夢を見るという。「夜着たる衣を返して着れば…恋しき人の必ず夢に見ゆると言へり」（頭注）。「いとせめて恋しき時はぬばたまの夜の衣を返してぞ着る」（古今・恋五五四　小野小町）

『最勝四天王院障子和歌』（書502・8）

春日野

d01　春日山野辺の若菜は知られけり年を積みける神の慮を

吉野山

d02　み吉野の外山の花を吹風にしばしは晴れぬ峰の白雲

三輪山

d03　三輪の杉を訪ねて来鳴け時鳥山本標めし契ならねど

竜田山

d04　秋の色は木の葉のみかは竜田山袖に萎るゝ小牡鹿の声

初瀬山

d05　雪曇る初瀬の檜原あはれ也鐘よりほかに夕暮の空

難波潟

d06　難波潟霞に消えて行く雁の名残を残す海士の釣舟

住吉浜

d07　思ひやる神代の春ぞ住吉の遠里小野の霞なりける

葦屋里

d08　五月雨は隙こそなけれ津の国の葦屋の里の雲の八重葺き

布引滝

d09　あしやまの嵐の緯に織りなみて涼しく落つる布引の滝

生田森

d10　白露のしばし袖にと思へども生田の森に秋風ぞ吹く

和歌浦

d11　玉津嶋昔の跡に風吹けば絵島に濡るゝ若の浦波

吹上浜

d12　紀伊の国やいざ吹上の浜に出て雪の潮風空に眺めん

交野

d13　散る雪に冬も交野の桜狩花ならなくに濡れくぞ行く

水無瀬川

d14　水無瀬河木の葉さやけき初風に鹿の音洗ふ菊の下水

須磨浦

d15　朝凪に馴らはぬ浪に夢も見ず馴れなばいかに須磨の関守

明石浦

d16　秋の夜の月ゆゑ見たる浦の名を雲に明石の告げて過ぬる

飾磨市

d17　古への藍よりも濃き御世なれや飾磨の褐の色を見るにも

松浦山

d18　唐錦さらに見よとや松浦山残る紅葉も枝に一村

因幡山

d19　峰の松裾野の萩も靡きゝて因幡の山はたゞ秋の風

高砂

d20　高砂の尾上に風や渡るらむ松の下枝を越ゆる鹿の音

野中清水

d21　心あれや野中の清水影澄みて昔に宿る夏の夜の月

天橋立

d22　橋立や松風霞む明ぼのに天の門帰る春の雁金

宇治川

d23 網代木にいさよふ浪の音深て独りや寝ぬる宇治の橋姫

大井川

d24 嵐山今日の御幸の狩衣錦になれと散る紅葉哉

鳥羽

d25 里占むる鳥羽田の稲葉ほのぐ〳〵と霧隠れゆく淀の河舟

伏見里

d26 秋は空里は伏見の夕まぐれ雲より下ろす荻の上風

泉川

d27 泉河幾三日の原過ぬとも夏は思はぬ衣貸せ山

小塩山

d28 小塩山神の験を松の葉に契りし色は変るものかは

逢坂関

d29 朝霞関の岩門立ち馴らし逢坂越ゆる春は来にけり

志賀浦

d30 志賀の浦やしばし時雨の雲ながら雪になりゆく山嵐の風

鈴鹿山

d31 紅葉葉の関は鈴鹿の伊勢の山錦を盗む風を通すな

二見浦

d32 玉くしげ二見の浦の名なりけり明くる習ひは夏の夜の月

大淀浦

d33 大淀の春立つ浪のいかならん恨みてのみも帰る雁金

鳴海浦

d34 聞からにあはれ鳴海の小夜千鳥霧立つ浪の末の松風

浜名橋

d35 又や見ん雲井の雁に事問はむ浜名の橋の秋霧の空

宇津山

d36 蔦の色昔を今に分なして心細きは宇津の山道

更級里

d37 月出ばよも更級の夜半の雲姨捨ならぬ秋の山かは

清見関

d38 清見潟涼しや月の秋の夜を寝ぬに明くるは習ひ成けり

富士山

d39 雪の上に靡きて残る富士の峰の煙涼しき夏の空哉

武蔵野

d40 武蔵野の春焼く草のゆかりとて煙に深き朝霞哉

白河関

d41 初雪に冬草分る朝ぼらけ奥ぞゆかしき白河の関

阿武隈川

d42 君が代に阿武隈河の友千鳥八千世と鳴けば末はるかなり

安達原

d43 紅葉さへ安達の原の夕附日檀に春の色は見ざりき

宮城野

d44 草枕まだ宮城野の露にして浅くも秋を眺めつるかな

安積沼

d45 都思ふ安積の沼の花かつみかつ見る方は三日月の空

塩竈浦

d46 人問はゞいかゞ語らん塩竈の松風緩き春の曙

校注

d01 ○春日野…大和国の歌枕。奈良市春日野町、奈良市街の東方の丘陵。春日山は三笠山・若草山などを含む春日神社の背後の山の総称。○若菜…春のはじめに摘んで、食用にする野草。「春日野の若菜摘みにや白妙の袖ふりはへて人の行くらむ」（古今・春二二　紀貫之）　○神の慮…藤原氏の氏神である春日神社の恵み。「慮」は「めぐみ」と読んだ。「恵」の誤写か。

d02 ○吉野山…大和国の歌枕。吉野郡の山。吉野山だけでなく、金峰山・水分山などの総称。○外山…人里に近い山。○峰の白

雲…「花」を「雲」に見立てたもの。「桜花咲きにけらしな足曳きの山の峡より見ゆる白雲」（古今・春五九　紀貫之）

d03 本歌「我が庵は三輪の山もと恋しくは訪ひ来ませ杉立てる門」（古今・雑九八二　読人不知）　○三輪山…大和国の歌枕。桜井市三輪。三輪山全体を神体とする大神（おほみわ）神社で有名。○三輪の杉…苧環（おだまき）説話に拠る。○山本標めし契…山本に標を付けたという約束。本歌に拠る。

d04 ○竜田山…大和国の歌枕。生駒郡斑鳩町竜田。紅葉の名所。○秋の色…秋の情趣。漢語「秋色」の訓読。○萎るゝ…（袖が）ぐっしょりと涙で濡れる。○小牡鹿の声…雄鹿の鳴き声は悲しさを催すものであった。「奥山に紅葉踏み分け鳴く鹿の声聞く時ぞ秋は悲しき」（古今・秋二一五　読人不知）

d05 ○初瀬山…大和国の歌枕。桜井市初瀬町。初瀬山・巻向山・三輪山などに囲まれた峡谷。長谷寺で有名。○雪曇る…雪で空が覆われて暗くなる。○初瀬の檜原…この一帯には檜原が多くあった。「三諸つく三輪山見ればこもりくの初瀬の檜原思ほゆるかも」（万葉・巻七・一〇九九）　○鐘よりほかに…長谷寺の鐘以外に。「夕霧に梢も見えず初瀬山入相の鐘の音ばかりして」（詞花・秋一一二　源兼昌）

d06 ○難波潟…摂津国の歌枕。大阪市の淀川の河口周辺。葦が繁茂していた。○霞に消えて…春霞の中に紛れて見えなくなる。「須磨の浦のなぎたる朝は目も春に霞にまがふ海人の釣舟」（新古今・雑一五九〇　藤原孝善）　○名残を残す…名残を感じさせる。▽「ほのぼのと明石の浦の朝霧に島隠れ行く舟をしぞ思ふ」（古今・羇旅四〇九　読人不知）を春の眺望に転換させたもの。

d07 ○住吉浜…摂津国の歌枕。大阪市住吉区の海岸。住吉大社がある。○思ひやる…想像する。○遠里小野…摂津国の歌枕。大阪市住吉区と堺市にまたがる地域。▽「神代の春」を想像すると、浮かんでくるのは遠里小野の霞という。

d08 本歌「津の国の昆陽とも人を言ふべきに隙こそなけれ葦の八重葺き」（後拾遺・恋六九一　和泉式部）　○葦屋里…摂津国の歌枕。芦屋市を含む広大な地域。○隙…「葦」が繁茂することの連想で「隙なし」は縁語。○八重葺き…葦の八重葺きは隙間がないことから、「雲」の比喩とした。「八重葺きの隙だにあらば葦の屋に音せぬ風はあらじとを知れ」（後拾遺・雑九五六　藤原定頼）

d09 ▽底本「あしやまの」を他本により「夏山の」に修訂。○布引滝…摂津国の歌枕。神戸市中央区、生田川上流の滝。○嵐の緯…嵐によって緯（横糸）のように見える状態。「霜のたて露の緯こそ弱からし山の錦の織ればかつ散る」（古今・秋二九一　藤原関雄）　○織りなみて…「なむ」は並べて一つにすること。縦糸と横糸を織り合わせて。「緯」は「織る」の縁語。

d10 ○生田森…摂津国の歌枕。神戸市中央区を中心とする地域。○しばし袖に…（白露を）しばらく袖に置いた状態のままで。○秋風ぞ吹く…上句を承け、しかし無情にも露を散らす秋風が吹く。「君住まば問はましものを津の国の生田の森の秋の初風」（詞花・秋八三　清胤）

d11 ○和歌浦…紀伊国の歌枕。玉津島神社のある片男波の入江付近。○玉津島…玉津島神社。祭神は稚日女尊（わかひるめのみこと）であったが、神功皇后を併祀し、さらに和歌浦という地名の連想で衣通姫も併祀され、住吉・柿本と共に和歌三神を形成した。○絵島…淡路国の歌枕。兵庫県津名郡岩屋町、淡路島北端の東側、海に臨んだ岩礁。「巡りきて見るに袂を濡らすかな絵島に留めし水茎の跡」（建礼門院右京太夫集七九）　○若の浦波…現実には和歌の浦波が絵島を濡らすとは考えられないが、都人には地理的な感覚は無い。

d12 ○吹上浜…紀伊国の歌枕。和歌山市の湊から雑賀の西浜にかけ

ての海岸。「風はやみ吹上の浜のかたさらに思ふ心に比べても見む」（実方集二五六）　○いざ吹上…いざ「吹く」に掛ける。○雪の潮風…雪まじりの潮風。稀少例。

d13 本歌「又や見ん交野の御野の桜狩雪の花散る春の曙」（新古今・春一一四　藤原俊成）　○交野…河内国の歌枕。交野市から枚方市にかけての地域。○花ならなくに…花でもないのに。「しるしなき音をも鳴く哉鶯の今年のみ散る花ならなくに」（古今・春一一〇　凡河内躬恒）　○濡れ〳〵ぞ…濡れながら。「濡れ〳〵も猶狩り行かんはし鷹の上羽の雪を打ち払ひつつ」（金葉・冬二八一　源道済）

d14 ○水無瀬川…摂津国の歌枕。平安当初は普通名詞だったが、次第に特定の地を示すようになる。大阪府三島郡島本町。○鹿の音洗ふ…鹿の鳴き声を鮮明にすることの印象的表現。○菊の下水…菊の下を流れる水。延命の仙薬とされた。「山川の菊の下水いかなれば流れて人の老をせくらむ」（新古今・賀七一七　藤原興風）　▽南陽酈（れき）県の甘谷には、菊の露が川の水となって流れ、それを飲む人は不老長寿を保つという故事（芸文類聚所引風俗通。抱朴子。和歌童蒙抄）を詠む。参考「谷水洗花。汲下流而得上寿者三十余家」（和漢朗詠・九日付菊・二六四　紀長谷雄）

d15 本歌「淡路島通ふ千鳥の鳴く声に幾夜寝覚めぬ須磨の関守」（金葉・冬二七〇　源兼昌）　○須磨浦…摂津国の歌枕。神戸市須磨区の一部、特に海岸に近いあたり。○朝凪…朝、風がなく海の浪が静かな状態。○馴らはぬ浪・朝凪にも拘わらずに寄せる浪。○馴れなばいかに…（朝凪に）馴れて静かな浪であったならば、どんなにか夢を見ることであろうに。「知るや君知らずはいかにつらからむ我がかくばかり思ふ心を」（拾遺・恋七五四　読人不知）

d16 ○明石浦…播磨国の歌枕。明石市の海岸。○月ゆゑ見たる…月が明るいので、見ている。「播磨潟ここを明石といふことは月の光の澄めばなりけり」（重家集七一）　○雲に明石の…「明石」に「明し」を掛ける。雲が明るい状態のままに過ぎる意の表現。「有明の月も明石の浦風に浪ばかりこそ寄ると見えしか」（金葉・秋二一六　平忠盛）

d17 ○飾磨市…姫路市飾磨区。褐（かち）と呼ばれた染料の産地で、それで濃い紺色に染めた布を扱う市が立った。○藍よりも濃き…「青出于藍而青于藍」（荀子）に拠る。昔よりも今の御代が勝れていることを、褐の色に喩えて表現した。「鶯の古巣より立つ時鳥藍よりも濃き声の色かな」（西行上人集一四七）

d18 本歌「唐錦枝に一むら残れるは秋の形見を絶たぬなりけり」（拾遺・冬二二〇　遍昭）　○松浦山…筑紫の歌枕。佐賀県東松浦郡及び唐津市の虹の松原を中心とした唐津湾の海岸。○唐錦…唐織の錦。「紅葉」の比喩。○さらに見よとや…領布（ひれ）振る松浦佐用姫の伝説を響かせる。

d19 本歌「立ち別れ因幡の山の峰に生ふる松とし聞かば今帰りこむ」（古今・離別三六五　在原行平）　○因幡山…因幡国の歌枕。鳥取県岩美郡国府町。○峰の松…「松」に「待つ」を掛ける。○裾野の萩…松ばかりか裾野には萩までもがの意。○秋の風…「秋」に「飽き」を掛ける。「待つ」という名をもつ「松」には、ただ秋風だけが吹くという寂寥感。

d20 ○高砂…播磨国の歌枕。高砂市の加古川河口にできた三角州。○松の下枝…松の下の方の枝。「沖津風吹きにけらしな住吉の松の下枝を洗ふ白浪」（後拾遺・雑一〇六三　源経信）　○越ゆる鹿の音…鹿の鳴き声が風に乗って、松の下枝を越えるように聞こえる。「志賀の里の稲葉に風は伝ひきて長等の山を越ゆる鹿の音」（拾玉集五六八二）

d21 本歌「いにしへの野中の清水ゆるけれど本の心を知る人ぞ汲む」（古今・雑八八七　読人不知）　○野中清水…播磨国の歌

枕。神戸市西区岩岡町野中にあったとされる湧き水。あるいは印南野、加古川と明石川の間に広がる平地とされる。○心あれや…情趣があるのだろうか。「逢坂の関の関守心あれや岩間の清水影をだに見む」（久安百首・恋五六三　藤原隆季）　○昔に宿る…昔に宿ったと同じく。

d22 本歌「秋風に声を帆に上げてくる舟は天の門渡る雁にぞありける」（古今・秋二一二　藤原菅根）　○天橋立…丹後国の歌枕。京都府宮津市。○松風霞む…目に見えない風が霞んでいるという印象的表現。○天の門…天を海に見立てて、その水門（みなと）という。

d23 本歌「もののふの八十氏川の網代木にいさよふ浪のゆくへ知らずも」（万葉・巻三・二六六　柿本人麻呂）・「さむしろに衣片敷き今宵もや我を待つらむ宇治の橋姫」（古今・恋六八九　読人不知）　○宇治川…山城国の歌枕。宇治市付近を流れる川。○網代木…氷魚（ひお）などを捕るための漁具（網代）を取り付ける杭。○音深て…音までも夜更けまで聞こえてきてという印象的表現。○宇治の橋姫…宇治橋を守る女神。転じて、宇治に住む女性をも言う。

d24 本歌「朝まだき嵐の山の寒ければ紅葉の錦着ぬ人ぞなき」（拾遺・秋二一〇　藤原公任）　○大井川…山城国の歌枕。桂川の部分の名で、京都市西京区嵐山の麓あたりをいう。「大堰川」とも。○嵐山…山城国の歌枕。京都市西京区、大井川の西岸にある山。木の葉を散らす「嵐」を掛ける。○狩衣…もと公家の鷹狩の時に着た衣服で、平安中期には日常の衣服となった。

d25 本歌「ほのぼのと明石の浦の朝霧に島隠れ行く舟をしぞ思ふ」（古今・羇旅四〇九　読人不知）　○鳥羽…山城国の歌枕。京都市南区上鳥羽と伏見区下鳥羽の一帯。○占むる…大部分を占める。○ほのぐと…かすかに。○淀の河舟…淀あたりを行く舟。▽本歌の言い回しを淀の情景に宛てたもの。

d26 本歌「秋はなほ夕まぐれこそただならね荻の上風萩の下露」（和漢朗詠・秋興二二九　藤原義孝）　○伏見里…山城国の歌枕。京都市伏見区の一帯。○秋は空…秋は空が素晴らしい。「月よりも秋は空こそ哀なれ晴れずは澄まん甲斐なからまし」（長秋詠藻四一）　○里は伏見…里は伏見に限る。○夕まぐれ…夕方の薄暗いこと。またその頃。○荻の上風…荻の葉上を吹く風。雲から吹くので「下ろす」と表現する。

d27 本歌「都出でて今日みかの原泉川川風寒し衣貸せ山」（古今・羇旅四〇八　読人不知）　○泉川…山城国の歌枕。京都府相楽郡を流れる木津川の古名。「いつ見」に掛け、「三日」の「三（み）」に掛けた「見」を導く。○三日の原…瓶原（みかのはら）。山城国の歌枕。相楽郡加茂町。○夏は思はぬ…夏には思ってもみない。○衣貸せ山…衣「貸せ」を地名「鹿背山」に掛ける。「鹿背山」は山城国の歌枕。相楽郡加茂町と木津町との境に位置し、木津川を隔てて瓶原に面する。

d28 ○小塩山…山城国の歌枕。京都市西京区大原野町にある山。麓にある大原野神社は春日大社を勧請したもの。「大原や小塩の山の小松原はや木高かれ千代の蔭見む」（後撰・慶賀一三七三　紀貫之）　○神の験…神の霊験。○変るものかは…どうして変わることがあろうか。「かは」は反語の表現。

d29 本歌「逢坂の関の岩角踏みならし山立ち出づる桐原の駒」（拾遺・秋一六九　藤原高遠）　○逢坂関…近江国の歌枕。○立ち馴らし…（春の朝霞が）立つことに馴れた。○逢坂越ゆる…「春」の擬人化。逢坂の関を越えてやって来る。

d30 ○志賀浦…近江国の歌枕。大津市、琵琶湖の西南岸の地。○雲ながら…雲であるのに。○雪になりゆく…雪模様に変わって行く。

d31 ○鈴鹿山…伊勢国の歌枕。鈴鹿市に属するが、近江国との境にあり、その南端の鈴鹿の関は交通の要衝。○関…（紅葉葉など

を）堰き止めるもの。「紅葉葉の寄れる網代は飽かずして過ぎにし秋の関にぞありける」（能宣集九一）　○錦…「紅葉」の比喩。　○盗む…「錦」に喩えられる紅葉を散らすことを「盗む」とした。　○通す…「関」の縁語。

d32 本歌「夕づく夜おぼつかなきを玉匣二見の浦は明けてこそ見め」（古今・羇旅四一七　藤原兼輔）　○二見浦…伊勢国の歌枕。伊勢市二見町、五十鈴川河口から夫婦岩の立つ立石崎までの海岸。　○玉くしげ…「蓋（ふた）」という縁語から「二見の浦」に掛かる枕詞。「明くる」も「玉くしげ」の縁語。

d33 本歌「大淀の松はつらくもあらなくに恨みてのみも返る浪かな」（伊勢物語・七二段）　○大淀浦…伊勢国の歌枕。三重県多気郡明和町大淀。　○恨み…「浦見」を掛ける。　○帰る雁金…「帰る」は「返る」を掛け、「返る」は「浪」の縁語。「薄墨に書く玉梓と見ゆるかな霞める空に帰る雁金」（後拾遺・春七一　津守国基）

d34 ○鳴海浦…尾張国の歌枕。名古屋市緑区鳴海町。　○聞くからに…聞くだけでもう。　○あはれ鳴海…「鳴海」に「成る」を掛ける。「いかで我心をだにも遣りてしか遠く鳴海の浦見がてらに」（古今和歌六帖・第三「うら」・一八八七）　○小夜千鳥…夜中に鳴く千鳥。　○浪の末の松風…松の梢を浪が越えているかのように見え、そこに風が吹いているさま。「末の松山」（古今・東歌一〇九三）に拠る発想。

d35 本歌「春の来る道や浜名の橋ならむ今日も霞の立ち渡りつつ」（能宣集一八三）・「又や見ん交野の御野の桜狩花の雪散る春の曙」（新古今・春一一四　藤原俊成）　○浜名橋…遠江国の歌枕。浜名郡新居町、浜名湖の出口の浜名川に架けた橋。　○雲井の雁…雲の彼方を飛んでいる雁。

d36 本歌「駿河なる宇津の山辺のうつつにも夢にも人に逢はぬなりけり」（伊勢物語・九段）　○宇津山…駿河国の歌枕・安倍郡と志太郡の境、宇津谷峠のこと。　○蔦…「わが入らむとする道はいと暗う細きに、蔦かへでは茂り、もの心ぼそく」（伊勢物語・九段）　○昔を今に分なして…昔と今とをことさらに区切って。「忘らるる昔を今になすものは花橘の匂ひなりけり」（万代・夏七〇九　八条院六条）

d37 本歌「我が心なぐさめかねつ更級や姨捨山に照る月を見て」（古今・雑八七八　読人不知）　○更級里…信濃国の歌枕。更級郡。　○よも更級…「更級」に「さらじな」を掛ける。決して避けることができない。本歌のいう姨捨棄老説話を暗示させる。　○姨捨…「姨捨山」は更埴市にある冠着（かむりき）山のこと。　○秋の山かは…「かは」は反語の表現。

d38 本歌「夏の夜を寝ぬに明けぬと言ひおきし人は物をや思はざりけむ」（和漢朗詠・夏夜一五三）　○清見潟…駿河国の歌枕。清水市興津町あたりから三保の崎へかけての海岸。清見関があったことで有名。　○涼しや…「や」は間投助詞。「涼しやと草むらごとに立ち寄れば暑さぞ増さる常夏の花」（和漢朗詠・納涼一六五）　○寝ぬに明くるは…寝られないままに夜が明けるのは。

d39 ○富士山…駿河国の歌枕。　○靡きて残る…（煙が）靡きながら残る。「人知れぬ思ひを常に駿河なる富士の山こそ我が身なりけれ」（古今・恋五三四　読人不知）　○煙涼しき…（雪によって）煙が涼しく感じられる。「時知らぬ山は富士の嶺いつとてか鹿の子まだらに雪の降るらむ」（伊勢物語・九段）

d40 本歌「武蔵野の草のゆかりと聞くからに同じ野辺とも睦まじきかな」（古今和歌六帖・第二「ざふのの」・一一五七）　○武蔵野…武蔵国の歌枕。東京の西郊から川越にかけての野原。　○春焼く草…新しい草が生えるように、春に雑草を焼く。「春日野は今日はな焼きそ若草のつまも籠もれり我も籠もれり」（古今・春一七　読人不知）　○ゆかり…関係のあること。　○煙に深き…煙の上にさらに重なって深い。

d41 ○白河関…陸奥の歌枕。岩代国、今の福島県白河市。ここを越えると陸奥であったので、磐城国の勿来の関と共に重要な関所であった。　○冬草分る…冬草を踏み分けて歩む。　○奥ぞゆかしき…踏み分けたその奥。「陸奥」に掛ける。　○白河の関…「白」の縁で「雪」に掛ける。「東路も年も末にや成りぬらん雪降りにけり白河の関」（千載・羇旅五四三　印西）

d42 本歌「塩の山差出の磯に住む千鳥君が御世をば八千代とぞ鳴く」（古今・賀三四五　読人不知）・「君が代に阿武隈川の底清み千歳を経つつ住まむとぞ思ふ」（詞花・賀一六一　藤原道長）　○阿武隈川…陸奥の歌枕。岩代国（福島県）の南の旭嶽から北流して陸前国（宮城県）に入り、太平洋に注ぐ。　○阿武隈川…本歌に同じく、聖代に「会ふ」の意を掛ける。　○友千鳥…数多く群れをなす千鳥。　○八千世…極めて長い年代。

d43 本歌「陸奥の安達の原の白檀心こはくも見ゆる君かな」（拾遺・恋九○五　読人不知）　○安達原…陸奥の歌枕。岩代国、今の福島県安達郡の安達太良山の麓にある原野。　○安達…紅葉さへ「あり」の意を掛ける。　○夕附日…夕方の日の光。　○檀…ニシキギ科の落葉樹。木質が弓の材料に適する。　○春の色…春の情趣。

d44 ○宮城野…陸奥の歌枕。陸前国、今の宮城県仙台市の東方一帯の野。　○宮城野…「まだ」を承けて、「見る」の否定形の「見ぬ」を掛ける。「吹きあへぬ風はいかなる色とだにまだ宮城野の秋の夕暮」（建保名所百首・宮城野四○七　藤原行能）　○露…宮城野には「露」が多く詠まれた。「宮城野の本荒の小萩露を重み風を待つごと君をこそ待て」（古今・恋六九四　読人不知）　○浅くも…（秋も）浅いことにも。　▽秋も深いのに、まだ浅く眺めたこと。

d45 本歌「陸奥の安積の沼の花かつみかつ見る人に恋ひやわたらむ」（古今・恋六七七　読人不知）　○安積沼…陸奥の歌枕。岩代国、今の福島県郡山市日和田安積山公園近くにあったという沼。　○花かつみ…水辺に生える草花の名。菖蒲、真菰（まこも）など諸説あるが、未詳。本歌と同じく、「かつ見る」を掛ける。

d46 本歌「我が背子を都に遣りて塩竈のまがきの島の松ぞ恋しき」（古今・東歌一○八九）　○塩竈浦…陸奥の歌枕。陸前国、今の宮城県塩釜市。松島湾全体の眺望も含む。　○松風緩き…「松」に「待つ」を掛ける。人を待つという松風も緩く感じられる。

Annotation to Priest Jien's Waka Poems, in particular, the 50 Poems consisting of Four Chinese Characters by ex-Emperor ＜仙洞句題五十首＞, and the Poems on Shoji screen of Saisho Shitenno-In ＜最勝四天王院障子和歌＞.

Hajime ISHIKAWA

ABSTRACT

In 1201, the year of Ken-nin 1st, Ex-Emperor Gotoba ordered Six Poets at that time to compose the 50 Poems consisting of Four Chinese Characters ＜仙洞句題五十首.＞. And Gotoba constructed the Saisho Shitenno-in Temple ＜最勝四天王院＞ for the honor of himself.

That Temple was drawed 46 pictures on Shoji Screen, famous place in Japan. Then Gotoba ordered Ten Poets to compose 46 poems concerning that pictures ＜最勝四天王院障子和歌＞.

This Annotation is dealing with Jien's Waka Poems on both contents.